

ダメ人間。

しかも、かまってちゃん。

今回は、そんな面倒くさい人間の相手をさせられる、健気な少女のお話。

17 戦目

ダメ人間は斯^かく語りき

私の名前は高千穂ツバキ。

地元のゾイエス学園に通っている、普通の小学五年生です。

普通の小学生は放課後に和服エプロンの制服を着て、お店の接客業務をしたりはしないかもしれませんが、私にとってはこれが日常。優しい先輩達と一緒に、とても楽しい居場所です。

「ツバぴよん、膝枕。あたしが眠るまで頭をナデナデして」

……前言撤回です。基本的には楽しい居場所です。

此处は『きよくちせん屋』の店内。今日は私の出勤日で、もう一人のフロア担当のタオエンさんは、ゴミを見るような目で私達の席を一瞥し、業務に戻った。もちろん、侮蔑の眼差しを向けられたのは私ではなく、先の発言をした人物だ。

「はーやーくー。してくんなきゃ、あたし死んじゃうー」

……いい年の大人が何を言っているのだろう。これが雇い主だと思っと、こちらが死にたくなってくる。

「そういうお店じゃないんですよ。だいたい、なんで四人掛けの席なのに並んで座ってるんですか。というか私、仕事なんですが」

「いいじゃない！ どうせ客なんていないんだし！」

この店の経営者とは思えない言い草である。どうして潰れないのか不思議でならない。

そう。彼がこの『きよくちせん屋』のオーナー——通称〈管理人〉。

珍しく店に顔を出したと思いきや、私を見つけるなり客席に座らせ、この有様だ。

「相手してよ、ツバぴよん。問答無用で優しくされたいのー」

そう言っつて私の膝に頭を乗せてくるダメ人間——もとい〈管理人〉。現在の姿だからせーふだが、本来の姿であれば完全にアウトな絵面だと思う。彼は——男性である——この店に現れる際、現在のように十代半ばくらいの少女の姿で現れる。猫耳フードの付いた黒いゴスロリ衣装に灰色の髪という、明らかに趣味であろう容姿は願望の表れなのだろうか。

「小学生に甘えないでくださいよ。恥ずかしくないんですか？」

「そう言いつつ撫でてくれるツバぴよん、しゅき」

気持ち悪い。見た目が女の子でも、中身が男性と知っているので、さすがにこの発言は気持ち悪い。

「——」

「ああつ、至高の膝枕が……」

無言で立ち上がり、〈管理人〉の向かいの席に移動する。

「……で、何の用ですか」

「ちょっと、めんどくさいのに絡まれたなあって顔しないでよ！ ショックだから！ もつと優しくしてよお……!!」

上半身を起こした〈管理人〉は、顔をテーブルに寄せ、脱力した姿勢で嘆いた^{なげ}。これは面倒くさい。

「マイスター……」

「この姿の時は『キョウシユウちゃん』って呼んで！」

掛け値なしに面倒くさい。

「はいはい。どうしたんですか？」

仕方がないのでにこやかに対応すると、〈管理人〉はようやく本題を切り出した。

「いやさあ、店もこの有様じゃない？」

姿勢はそのまま、管理人が店内に視線を巡らせる。前述の通り、今は他に客はいない。

「どうしよかなって」

店を閉めようか悩んでいるという事だろうか。この店は〈管理人〉の趣味で、一階は喫茶スペース、二階は展示スペースとなっている。

「去年は小説もほぼ書いていませんでしたね」

小説というのは、これも〈管理人〉の趣味で、喫茶スペースで読めるようになっていた。

ちなみに、私が出演している作品もあるので、よろしければ。

「書くの、しんどくてね。時間が経てば創作意欲が湧く^わと思ってたんだけど……まだ新作やる気にならない。始めちゃったら、終わらせなきゃいけなくなるし」

「はあ……」

私は創作活動をしないので判らないが、生みの苦しみというものだろうか。たしかに直近の長編は——私が出演している——完結に七年かかり、後半は特に大変そうだった。

「最近はプラモ熱が再燃して、そっちに時間を使ってるのと、動画投稿の方が楽しくなってる……再生数は全然だけど」

小説を書くのに割ける時間がないという事か。ちなみに、動画投稿は現在三年目で、まだチャンネル登録者は二百以下だ。正直、よく続いていると思う。

思えば、小説もそうだ。書くのが大変で、それに見合う反応もないのに、よく完結させられたと思う。楽しいから——自己満足だけで続けられるものだろうか。

「もう、やめようかなって……」

「——好きにしたらいいじゃないですか」

「えー……がんばれとか言ってくんないの？」

「言ってほしかったんですか？」



Mission complete

「へこむのでやめてください」

『がんばれ』という言葉は人によっては禁句に近い。少なくとも管理人は嫌っている。

「よしよし。がんばれがんばれ」

だから私は、俯せになつて顔が見えない（管理人の頭を、フード越しに撫でた。これは愚痴の相手をさせられた仕返しであつて、優しさではない。嫌がらせだ。

「……ツバびよん、結婚して」

「何を言っているんですか気持ち悪い死ねばいいのに」

タイミング良くコーヒーを運んできたタオエンさんが、（管理人の世迷言を一蹴した。

あとがき

どうも、るとおあさ流遠亜沙です。

『そーりよくせんっ！』十七戦目をお届け致します。

『そーりよくせんっ！』としてはちょうど一年ぶり、小説自体は五月の『ゾイヤミ』番外編以来の更新です。はい、去年は二本しか書いてません。

今回はツバキ視点で、キョウシユウちゃん初登場でした。他人とは思えません。

……まあ、僕なんですが。

よきところで謝辞を。

ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。本編の内容がすべてです。

『局地戦チャンネル』もよろしくね。

2023／3／30 流遠亜沙

アンケートに答える

『局地戦チャンネル』に行く

『そーりよくせんっ！』ページに戻る